

## **Oracle® Application Server 10g**

クイック・インストールおよびアップグレード・ガイド

10g (9.0.4) for Linux x86

部品番号 : B13565-01

2004 年 1 月

Oracle Application Server 10g クイック・インストールおよびアップグレード・ガイド, 10g (9.0.4) for Linux x86

部品番号 : B13565-01

原本名 : Oracle Application Server 10g Quick Installation and Upgrade Guide, 10g (9.0.4) for Linux x86

原本部品番号 : B10906-03

Copyright © 2003 Oracle Corporation. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

---

---

# 目次

## 1 概要

## 2 要件

2.1	ハードウェア要件のチェック .....	2-2
2.2	ソフトウェア要件のチェック .....	2-3
2.2.1	Red Hat 2.1 システムのソフトウェア要件 .....	2-3
2.2.2	Red Hat 3.0 システムのソフトウェア要件 .....	2-5
2.2.3	UnitedLinux 1.0 システムのソフトウェア要件 .....	2-7
2.3	インベントリ・ディレクトリのグループの作成 .....	2-10
2.4	データベース・グループの作成 .....	2-11
2.5	オペレーティング・システム・ユーザーの作成 .....	2-11
2.6	環境変数のチェック .....	2-12
2.7	カーネル・パラメータの構成 .....	2-14
2.8	ポート使用状況のチェック .....	2-17
2.9	CD-ROM または DVD のマウント .....	2-18
2.10	インストーラの起動 .....	2-19

## 3 インストール

3.1	Java 開発者トポロジのインストール .....	3-2
3.2	Portal and Wireless 開発者トポロジのインストール .....	3-5
3.2.1	OracleAS Infrastructure 10g のインストール .....	3-5
3.2.2	Portal and Wireless インスタンスのインストール .....	3-9
3.2.3	UnitedLinux の追加のインストール手順 .....	3-12
3.3	「ようこそ」 ページへのアクセス .....	3-13

## 4 OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのインストール

## 5 アップグレード

5.1	表記規則 .....	5-2
5.2	アップグレード前のタスクの実行 .....	5-2
5.2.1	Oracle Application Server 10g (9.0.4) のインストール .....	5-2
5.3	J2EE and Web Cache のアップグレードの実行 .....	5-3
5.4	Portal and Wireless のアップグレードの実行 .....	5-4

## 6 その他のリソース

6.1	クイック・リファレンス .....	6-2
6.2	オラクル製品のインストールに関する情報 .....	6-2
6.3	Oracle Technology Network Japan .....	6-3
6.4	OracleDirect .....	6-5
6.5	サポートサービス .....	6-6
6.6	研修サービス .....	6-8

# 1

## 概要

Oracle Application Server を本番環境へインストールする前に、またはコンピュータに既存の Oracle ソフトウェアがインストールされている場合は、Oracle Application Server のインストール・ガイドおよび Oracle Application Server のリリース・ノートを確認することをお勧めします。

Oracle Application Server のクイック・インストールおよびアップグレード・ガイドでは、次の Oracle Application Server のインストール・タイプのインストール手順について説明します。

- **J2EE and Web Cache**
- **Portal and Wireless**

表 1-1 に、Oracle Application Server のクイック・インストールおよびアップグレード・ガイドの内容を示します。

表 1-1 このマニュアルの内容

章	内容
第 2 章 「要件」	2.1 項 「ハードウェア要件のチェック」 2.2 項 「ソフトウェア要件のチェック」 2.3 項 「インベントリ・ディレクトリのグループの作成」 2.4 項 「データベース・グループの作成」 2.5 項 「オペレーティング・システム・ユーザーの作成」 2.6 項 「環境変数のチェック」 2.7 項 「カーネル・パラメータの構成」 2.8 項 「ポート使用状況のチェック」 2.9 項 「CD-ROM または DVD のマウント」 2.10 項 「インストーラの起動」
第 3 章 「インストール」	3.1 項 「Java 開発者トポロジのインストール」 3.2 項 「Portal and Wireless 開発者トポロジのインストール」 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 3.2.1 項 「OracleAS Infrastructure 10g のインストール」</li> <li>■ 3.2.2 項 「Portal and Wireless インスタンスのインストール」</li> <li>■ 3.2.3 項 「UnitedLinux の追加のインストール手順」</li> </ul> 3.3 項 「「ようこそ」 ページへのアクセス」
第 4 章 「OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのインストール」	
第 5 章 「アップグレード」	5.1 項 「表記規則」 5.2 項 「アップグレード前のタスクの実行」 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 5.2.1 項 「Oracle Application Server 10g (9.0.4) のインストール」</li> </ul> 5.3 項 「J2EE and Web Cache のアップグレードの実行」 5.4 項 「Portal and Wireless のアップグレードの実行」
第 6 章 「その他のリソース」	6.1 項 「クイック・リファレンス」 6.2 項 「オラクル製品のインストールに関する情報」 6.3 項 「Oracle Technology Network Japan」 6.4 項 「OracleDirect」 6.5 項 「サポートサービス」 6.6 項 「研修サービス」

---

---

**注意：** 既存の Oracle ホームがあるコンピュータにインストールする場合は、インストールの前に Oracle Application Server のインストール・ガイドをお読みになることをお薦めします。Oracle 製品がインストールされているかどうかを確認するには、`/etc/oraInst.loc` ファイルが存在するかどうかを確認してください。

---

---

---

---

**注意：** DHCP が有効になっているコンピュータにインストールする場合は、インストールの前に Oracle Application Server のインストール・ガイドをお読みになることをお薦めします。

---

---

**関連項目：**

- Oracle Application Server のインストール・ガイド
- Oracle Application Server のアップグレード



この章では、Oracle Application Server のインストールのインストール前の要件について説明します。次の項の一覧にあるタスクを確認し、完了しておくことをお勧めします。

- 2.1 項「ハードウェア要件のチェック」
- 2.2 項「ソフトウェア要件のチェック」
- 2.3 項「インベントリ・ディレクトリのグループの作成」
- 2.4 項「データベース・グループの作成」
- 2.5 項「オペレーティング・システム・ユーザーの作成」
- 2.6 項「環境変数のチェック」
- 2.7 項「カーネル・パラメータの構成」
- 2.8 項「ポート使用状況のチェック」
- 2.9 項「CD-ROM または DVD のマウント」
- 2.10 項「インストーラの起動」

## 2.1 ハードウェア要件のチェック

お使いのコンピュータに Pentium 450 MHz またはそれ以上のプロセッサ (32 ビット) が搭載されていて、次のディスク領域およびメモリー要件を満たしていることを確認してください。

項目	Java 開発者 トポロジ	Portal and Wireless 開発者の インストール・タイプ	OracleAS Infrastructure 10g
メモリー	512 MB	1 GB	1 GB
ディスク領域	520 MB	1.10 GB	2.50 GB
/tmp 内の領域	250 MB	250 MB	250 MB
スワップ領域	1.5 GB	1.5 GB	1.5 GB

インストーラでは、ディスク領域の要件の数値が正確でない場合があります。上の表に示されているディスク領域の要件の数値を参照してください。

1. 物理 RAM サイズを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# grep MemTotal /proc/meminfo
```

2. 空きディスク領域の大きさを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
prompt> df -k dir.
```

**dir** を Oracle ホーム・ディレクトリに、あるいは、Oracle ホーム・ディレクトリがまだ存在しない場合はその親ディレクトリに置き換えます。たとえば、Oracle Application Server を /opt/oracle/infra にインストールする場合は、**dir** を /opt/oracle または /opt/oracle/infra に置き換えることができます。

3. 使用可能なスワップ領域の大きさを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# grep SwapTotal /proc/meminfo
```

必要な場合、追加のスワップ領域の構成方法については、お使いのオペレーティング・システムのマニュアルを参照してください。

## 2.2 ソフトウェア要件のチェック

Oracle Application Server は、Red Hat Enterprise Linux AS/ES Version 2.1、Version 3.0 および UnitedLinux 1.0 システム上でサポートされています。サポートされている Linux オペレーティング・システムの最新のリストは、<http://www.oracle.co.jp/> にある「システム要件」ページを参照してください。Linux ベンダーがサポートしていない、カスタマイズされたカーネルやモジュールは、サポートされません。

ソフトウェア要件の確認については、お使いの Linux 配布版に応じて、次の項のうちのいずれかを参照してください。

- [Red Hat 2.1 システムのソフトウェア要件](#)
- [Red Hat 3.0 システムのソフトウェア要件](#)
- [UnitedLinux 1.0 システムのソフトウェア要件](#)

### 2.2.1 Red Hat 2.1 システムのソフトウェア要件

Red Hat 2.1 システムに Oracle Application Server をインストールする前に、次の手順を完了してください。

---

---

**注意：** Oracle Application Server 10g (9.0.4) は、次のオペレーティング・システム固有のソフトウェアとの動作が保証されています。JDK のバージョンやオペレーティング・システムのバージョンなど、サポートされているオペレーティング・システム固有のソフトウェアの最新リストは、<http://www.oracle.co.jp/> にある「システム要件」ページを参照してください。

---

---

1. root ユーザーとしてログインします。
2. Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 がインストールされていることを確認します。  

```
# cat /etc/issue  
Red Hat Linux Advanced Server release 2.1AS/\m (Pensacola)
```
3. 次のコマンドを使用して、Red Hat により承認された errata 25 patch またはそれ以上の errata patch が適用されていることを確認します。

```
# uname -r
```

たとえば、インストールされている Red Hat のバージョンに応じて、次のように errata 25 patch がコマンド出力に一覧表示されます。

```
kernel-2.4.9-e.25  
kernel-smp-2.4.9-e.25  
kernel-enterprise-2.4.9-e.25
```

Red Hat のパッチについては、次のサイトを参照してください。

<http://www.redhat.com>

---

---

**注意：** Red Hat の Web サイトから `errata` ファイルをダウンロードするには、Red Hat Network のアカウントを持っている必要があります。

---

---

4. `glibc-2.2.4-32` パッケージがインストールされていることを確認します。
5. 次のソフトウェア・パッケージまたはそれ以上がインストールされていることを確認します。
  - `gcc-2.96-108.1`
  - `pdksh-5.2.14-13`
  - `openmotif-2.1.30`
  - `sysstat-4.0.1`
  - `compat-glibc-6.2-2.1.3.2`
  - `libstdc++-2.96-108.1`

パッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージが存在しない場合は、次のコマンドを使用してダウンロードし、インストールします。

```
# rpm -i package_name
```

## 2.2.2 Red Hat 3.0 システムのソフトウェア要件

Red Hat 3.0 システムに Oracle Application Server をインストールする前に、次の手順を完了してください。

---

---

**注意：** Oracle Application Server 10g (9.0.4) は、次のオペレーティング・システム固有のソフトウェアとの動作が保証されています。JDK のバージョンやオペレーティング・システムのバージョンなど、サポートされているオペレーティング・システム固有のソフトウェアの最新リストは、<http://www.oracle.co.jp/> にある「システム要件」ページを参照してください。

---

---

1. root ユーザーとしてログインします。
2. Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 がインストールされていることを確認します。  

```
# cat /etc/issue
Red Hat Enterprise Linux AS release 3 (Taroon)
```

カーネルおよび glibc の最小バージョンは、次のとおりです。
  - 2.4.21-4-EL
  - glibc-2.3.2-95.3
3. 次のソフトウェア・パッケージまたはそれ以上がインストールされていることを確認します。
  - gcc-3.2.3-20
  - setarch-1.3-1
  - pdksh-5.2.14
  - openmotif21-2.1.30-8
  - gnome-libs-1.4.1.2.90-34.1
  - compat-glibc-7.x-2.2.4.32.5
  - compat-gcc-7.3-2.96.122
  - compat-libstdc++-7.3-2.96.122
  - compat-libstdc++-devel-7.3-2.96.122
  - compat-gcc-c++-7.3-2.96.122
  - sysstat-4.00.7

**注意:** Redhat 3.0 の場合、openmotif 2.1.30-8 に相当するパッケージは openmotif21-2.1.30-8 です。openmotif21-2.1.30-8 パッケージは、次のコマンドを入力することによって、Redhat 3.0 配布のディスク番号 3 からインストールできます。

```
$ rpm -ivh openmotif21-2.1.30-8
```

パッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージが存在しない場合は、次のコマンドを使用してダウンロードし、インストールします。

```
# rpm -i package_name
```

4. 次のシンボリック・リンクがあるかどうか確認します。

```
# cd /usr/bin
# ls -l gcc g++
gcc -> gcc296
g++ -> g++296
```

これらのリンクが存在しない場合は、次のようにして作成します。

- a. 既存ファイルのバックアップを作成します。

```
# mv /usr/bin/gcc /usr/bin/gcc.backup
# mv /usr/bin/g++ /usr/bin/g++.backup
```

- b. シンボリック・リンクを作成します。

```
# ln -s /usr/bin/gcc296 /usr/bin/gcc
# ln -s /usr/bin/g++296 /usr/bin/g++
```

必要な場合には元のファイルを復元できますが、Oracle Application Server が正しく再リンクされるようにするには、この手順で説明するようにリンクを再作成する必要があります。

5. hugemem カーネルが使用されている場合は、次のコマンドを使用してアーキテクチャを設定します。

```
prompt> setarch i386
```

6. patch no 3006854 を適用します。このパッチによって、/etc/libcwait.so ファイルが作成され、次の行が /etc/ld.so.preload ファイルに追加されます。

```
/etc/libcwait.so
```

## 2.2.3 UnitedLinux 1.0 システムのソフトウェア要件

UnitedLinux 1.0 システムに Oracle Application Server をインストールする前に、次の手順を完了してください。

---

---

**注意：** Oracle Application Server 10g (9.0.4) は、次のオペレーティング・システム固有のソフトウェアとの動作が保証されています。JDK のバージョンやオペレーティング・システムのバージョンなど、サポートされているオペレーティング・システム固有のソフトウェアの最新リストは、<http://www.oracle.co.jp/> にある「システム要件」ページを参照してください。

---

---

1. root ユーザーとしてログインします。
2. UnitedLinux 1.0 がインストールされていることを確認します。

```
# cat /etc/issue
Welcome to UnitedLinux 1.0 (i586) - Kernel \r (\l)
```

3. SP2a または SP3 がインストールされていることを確認します。サービス・パックのバージョンを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# rpm -qf /boot/vmlinuz
```

カーネルのバージョンに、文字列 2.4.19 が含まれている場合、SP2a がインストールされています。カーネルのバージョンに、文字列 2.4.21 が含まれている場合、SP3 がインストールされています。Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、SP2a および SP3 が保証されています。

SP2a の場合、サポートされているカーネルおよび glibc の最小バージョンは、次のとおりです。

- 2.4.19
- glibc-2.2.5-179

SP3 の場合、サポートされているカーネルおよび glibc の最小バージョンは、次のとおりです。

- 2.4.21
- glibc-2.2.5-213

4. 次のソフトウェア・パッケージまたはそれ以上がインストールされていることを確認します。
  - gcc\_old-2.95.3
  - pdksh-5.2.14

- openmotif-2.1.30MLI4
- sysstat-4.0.3
- libstdc++-3.20.2-38

パッケージがインストールされているかどうかを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージが存在しない場合は、次のコマンドを使用してダウンロードし、インストールします。

```
# rpm -i package_name
```

5. 次の `perl` 実行可能ファイルのシンボリック・リンクが存在しない場合は、作成します。

```
prompt> ln -sf /usr/bin/perl /usr/local/bin/perl
```

6. 次の `fuser` 実行可能ファイルのシンボリック・リンクが存在しない場合は、作成します。

```
prompt> ln -sf /bin/fuser /sbin/fuser
```

7. 適切なコンパイラ環境を作成します。

- a. `gcc_old` パッケージをインストールします。これによって、`/opt/gcc295` ディレクトリ内に旧コンパイラの `GCC 2.95.3` がインストールされます。

- b. 次のシンボリック・リンクがあるかどうか確認します。

```
# cd /usr/bin
# ls -l gcc cc
gcc -> /opt/gcc295/bin/gcc
cc -> /opt/gcc295/bin/gcc
```

これらのリンクが存在しない場合は、既存ファイルのバックアップを作成します。

```
# mv /usr/bin/gcc /usr/bin/gcc.backup
# mv /usr/bin/cc /usr/bin/cc.backup
```

シンボリック・リンクを作成します。

```
# ln -s /opt/gcc295/bin/gcc /usr/bin/gcc
# ln -s /opt/gcc295/bin/gcc /usr/bin/cc
```

必要な場合には元のファイルを復元できますが、`Oracle Application Server` が正しく再リンクされるようにするには、この手順で説明するようにリンクを再作成する必要があります。

- c. 次のシンボリック・リンクがない場合は、作成します。

```
prompt> ln -s \  
/opt/gcc295/lib/gcc-lib/i486-suse-linux/2.95.3/libgcc.a \  
/lib/libgcc.a
```

UnitedLinux の配布版によっては、上のコマンドの最初のパスに suse 以外の文字列が含まれている場合があります。

8. orarun パッケージがインストールされていた場合は、oracle ユーザーとして次の手順を実行し、環境をリセットします。
- a. 次のコマンドを入力します。
- ```
prompt> cd /etc/profile.d  
prompt> mv oracle.csh oracle.csh.bak  
prompt> mv oracle.sh oracle.sh.bak  
prompt> mv alljava.sh alljava.sh.bak  
prompt> mv alljava.csh alljava.csh.bak
```
- b. 任意のテキスト・エディタを使用して、\$HOME/.profile ファイルから次の行をコメント・アウトします。
- ```
../.oracle
```
- c. oracle ユーザー・アカウントからログアウトします。
- d. oracle ユーザー・アカウントにログインして、変更を有効にします。
9. Java パッケージがシステムにインストールされている場合は、JAVA\_HOME などの Java 環境変数を設定解除します。

---

---

**注意：** UnitedLinux の配布版とともに提供された Java パッケージは、インストールしないことをお勧めします。

---

---

10. /etc/services ファイルを確認して、次のポート範囲が利用可能であることを確認します。
- Oracle Internet Directory に必要なポート 3060 ~ 3129
  - Oracle Internet Directory (SSL) に必要なポート 3130 ~ 3199
  - Oracle Enterprise Manager (コンソール) に必要なポート 1812 ~ 1829
  - Oracle Enterprise Manager (エージェント) に必要なポート 1830 ~ 1849
  - Oracle Enterprise Manager (RMI) に必要なポート 1850 ~ 1869

必要に応じて `/etc/services` ファイルからエントリを削除し、システムを再起動します。エントリを削除するには、パッチ 3167528 に含まれる `perl` スクリプトを使用できます。

これらのポートが使用できない場合は、関連する構成アシスタントがインストール中に失敗します。

### 11. Network Information Service (NIS) を使用している場合：

- a. 次の行が `/etc/yp.conf` ファイルに存在していることを確認します。

```
hostname.domainname broadcast
```

- b. 次の行が `/etc/nsswitch.conf` ファイルに存在していることを確認します。

```
hosts: files nis dns
```

## 2.3 インベントリ・ディレクトリのグループの作成

製品ファイルを所有するために、ローカルのオペレーティング・システム・グループを作成します。グループにはどのような名前でも付けることができますが、このガイドでは `oinstall` という名前を使用します。`oinstall` グループを作成するには、`root` ユーザーとして次のように入力します。

```
# /usr/sbin/groupadd oinstall
```

オペレーティング・システムのユーザーとグループの詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照するか、システム管理者に問い合せてください。

## 2.4 データベース・グループの作成

この項は、Portal and Wireless 開発者トポロジをインストールする場合にのみ適用されません。

次のコマンドを使用して、dba および oper の 2 つのグループを作成します。

```
# /usr/sbin/groupadd dba
# /usr/sbin/groupadd oper
```

## 2.5 オペレーティング・システム・ユーザーの作成

ユーザーにはどのような名前でも付けることができますが、このガイドでは oracle という名前を使用します。このユーザーは、oinstall オペレーティング・システム・グループに属している必要があります。

Portal and Wireless 開発者トポロジをインストールする場合は、このユーザーを dba および oper のオペレーティング・システム・グループにも追加する必要があります。

Java 開発者トポロジの oracle オペレーティング・システム・ユーザーを作成するには、root ユーザーとして次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall oracle
```

Portal and Wireless 開発者トポロジの oracle オペレーティング・システム・ユーザーを作成するには、root ユーザーとして次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall -G dba,oper oracle
```

オペレーティング・システムのユーザーとグループの詳細は、オペレーティング・システムのドキュメントを参照するか、システム管理者に問い合せてください。

次のコマンドを入力して oracle ユーザーのパスワードを設定し、画面上の指示に従います。

```
# passwd oracle
```

## 2.6 環境変数のチェック

oracle ユーザーとしてログインする場合は、表 2-1 に示す環境変数の値を確認してください。

---

---

**注意：** 別のユーザーとして環境変数を設定し、後に "su - oracle" マンドを使用して oracle ユーザーに切り替えた場合は、環境変数が oracle ユーザーに渡されません。インストーラを起動する前に、必ず環境変数を確認してください。

---

---

表 2-1 環境変数

環境変数	説明
DISPLAY	現在のコンピュータに設定します。 例 (C シェル) : <pre>% setenv DISPLAY machine1.acme.com:0.0</pre> 例 (Bourne/Bash/Korn シェル) : <pre>\$ DISPLAY=machine1.acme.com:0.0; export DISPLAY</pre>
TMPDIR および TMP	インストーラで /tmp 以外のディレクトリを使用するには、環境変数 TMP および TMPDIR に、代わりにディレクトリのフル・パスを設定します。oracle ユーザーは、このディレクトリへの書込み権限を持っている必要があります。 例 (C シェル) : <pre>% setenv TMP /tmp2 % setenv TMPDIR /tmp2</pre> 例 (Bourne/Korn シェル) : <pre>\$ TMP=/tmp2; export TMP \$ TMPDIR=/tmp2; export TMPDIR</pre>
ORACLE_HOME	インストーラによって、この値の設定が解除されます。

表 2-1 環境変数 (続き)

環境変数	説明
PATH、CLASSPATH および LD_LIBRARY_PATH	<p>これらの変数にいずれの Oracle ホーム・ディレクトリへの参照も含まれていないことを確認します。環境変数の値を表示するには、次の echo コマンドを使用します。</p> <p>例 (C シェル) :</p> <pre>% echo \$PATH</pre> <p>例 (Bourne/Bash/Korn シェル) :</p> <pre>\$ echo \$PATH</pre> <p>環境変数 PATH に Oracle ホーム・ディレクトリが含まれている場合は、この変数に Oracle ホーム・ディレクトリ以外の現在ディレクトリが含まれるように設定します。</p>
TNS_ADMIN	<p>この環境変数が設定されていないことを確認します。</p> <p>例 (C シェル) :</p> <pre>% unsetenv TNS_ADMIN</pre> <p>例 (Bourne/Bash/Korn シェル) :</p> <pre>\$ unset TNS_ADMIN</pre>
ORA_NLS33	<p>この環境変数が設定されていないことを確認します。</p> <p>例 (C シェル) :</p> <pre>% unsetenv ORA_NLS33</pre> <p>例 (Bourne/Bash/Korn シェル) :</p> <pre>\$ unset ORA_NLS33</pre>
LD_BIND_NOW	<p>Linux システムでこの環境変数が設定されていないことを確認します。</p> <p>例 (C シェル) :</p> <pre>% unsetenv LD_BIND_NOW</pre> <p>例 (Bourne/Bash/Korn シェル) :</p> <pre>\$ unset LD_BIND_NOW</pre>

## 2.7 カーネル・パラメータの構成

この項は、Portal and Wireless 開発者トポロジをインストールする場合にのみ適用できます。OracleAS Metadata Repository のデータベースをインストールします。

表の後に示す手順は、値を確認して設定する方法について説明しています。

---



---

**注意：** Linux スレッド・モデルにより、各スレッドに対するプロセスが作成されます。Oracle Application Server は、パフォーマンスを向上させるために高度にマルチスレッド化されています。このため Linux では、カーネルが数百ものプロセスの処理を行える必要があります。

---



---

パラメータ	値	ファイル
semmsl	256	/proc/sys/kernel/sem
semmns	32000	
semopm	100	
semmni	142	
shmall	2097152	/proc/sys/kernel/shmall
shmmax	2147483648	/proc/sys/kernel/shmmax
shmmni	142	/proc/sys/kernel/shmmni
msgmax	8192	/proc/sys/kernel/msgmax
msgmnb	65535	/proc/sys/kernel/msgmnb
msgmni	2878	/proc/sys/kernel/msgmni
file-max	131072	/proc/sys/fs/file-max
ip_local_port_range	20000 65000	/proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range

---



---

**注意：** パラメータの現在の値がこの表に示した値よりも大きい場合は、そのパラメータの値を変更しないでください。

---



---

これらのカーネル・パラメータに指定された現在の値を表示し、必要に応じてその値を変更するには、次の手順に従います。

1. カーネル・パラメータの現在の値を表示するには、次のようなコマンドを入力します。

---



---

**注意：** 現在の値を記録し、変更する必要がある値を特定します。

---



---

パラメータ	コマンド
semmsl、semms、semopm および shmmni	# /sbin/sysctl -a   grep sem ここに記載したパラメータの順序で、セマフォ・パラメータの値を表示します。
shmall、shmmax および shmmni	# /sbin/sysctl -a   grep shm
msgmax、msgmnb および msgmni	# /sbin/sysctl -a   grep msg
file-max	# /sbin/sysctl -a   grep file-max
ip_local_port_range	# /sbin/sysctl -a   grep ip_local_port_range ポート番号の範囲を表示します。

2. いずれかのカーネル・パラメータの値が推奨値と異なる場合は、次の手順を実行します。
  - a. テキスト・エディタを使用して /etc/sysctl.conf ファイルを作成または編集し、次のような行を追加または編集します。

---

**注意：** 変更するカーネル・パラメータの値の行のみを含めます。セマフォ・パラメータ (kernel.sem) の場合は、4つの値すべてを指定する必要があります。ただし、現在の値のうちのいずれかが推奨値より大きい場合は、その大きいほうの値を指定します。

---

```
kernel.shmall = 2097152
kernel.shmmax = 2147483648
kernel.shmmni = 142
# semaphores: semmsl, semms, semopm, semmni
kernel.sem = 256 32000 100 142
fs.file-max = 131072
net.ipv4.ip_local_port_range = 20000 65000
kernel.msgmni = 2878
kernel.msgmax = 8192
kernel.msgmnb = 65535
```

/etc/sysctl.conf ファイル内に値を指定することによって、システムを再起動したときもその値が保たれます。

- b. 次のコマンドを実行して、カーネル・パラメータの現在の値を変更するには、次のコマンドを入力します。

```
# /sbin/sysctl -p
```

このコマンドからの出力を確認して、値が正しいことを確認します。値が誤っている場合は、`/etc/sysctl.conf` ファイルを編集して、このコマンドを再び実行します。

- c. UnitedLinux の場合にのみ、次のコマンドを入力して、システムを再起動したときに `/etc/sysctl.conf` ファイルが読み込まれるようにします。

```
# chkconfig boot.sysctl on
```

### oracle ユーザーのシェル制限の設定

Linux システム上のソフトウェアのパフォーマンスを向上させるために、oracle ユーザーのシェル制限を、ユーザーのデフォルトのシェルに応じて増やす必要があります。

Bourne/Bash シェルの制限	Korn シェルの制限	C/tcsh シェルの制限	ハード制限
nofile	nofile	descriptors	16384
noproc	processes	maxproc	16384

シェル制限を増やすには、次の手順を実行します。

1. 次の行を `/etc/security/limits.conf` ファイルに追加します。ここで `->` は、タブ文字を表しています。

```
* -> -> soft -> nproc -> -> 2047
* -> -> hard -> nproc -> -> 16384
* -> -> soft -> nofile -> -> 2048
* -> -> hard -> nofile -> -> 16384
```

2. 次の行がまだない場合は、`/etc/pam.d/login` ファイルに追加します。

```
session    required    /lib/security/pam_limits.so
```

3. oracle ユーザーのデフォルトのシェルに応じて、次の変更をデフォルト・シェルの起動ファイルに対して行います。

Bourne、Bash または Korn シェルの場合は、次の行を `/etc/profile` ファイルに追加します。

```
if [ $USER = "oracle" ]; then
    if [ $SHELL = "/bin/ksh" ]; then
        ulimit -p 16384
        ulimit -n 16384
    else
        ulimit -u 16384 -n 16384
    fi
fi
```

```
fi
```

C または tcsh シェルの場合は、次の行を `/etc/csh.login` ファイルに追加します。

```
if ( $USER == "oracle" ) then
    limit maxproc 16384
    limit descriptors 16384
endif
```

## 2.8 ポート使用状況のチェック

この項は、Portal and Wireless 開発者トポロジをインストールする場合にのみ適用できません。

ポート 1521 でリスニングしているアプリケーションが他にある場合、それらが別々のポートでリスニングするように設定する必要があります。

次のコマンドを使用して、ポート 1521 がコンピュータのアプリケーションによって使用されているかどうかを確認します。

```
prompt> netstat -an | grep 1521
```

出力を確認して、ポート 1521 が使用されているかどうかを確認してください。

ポート 1521 が OracleAS Metadata Repository によって使用されている場合は、そのポートを Portal and Wireless のインストールと共有できます。ポートの共有については、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドのドキュメントを参照してください。

ポート 1521 がサード・パーティのアプリケーションによって使用されている場合は、別のポートを使用するようにアプリケーションを構成する必要があります。ポートの共有については、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドまたはサード・パーティのドキュメントを参照してください。

## 2.9 CD-ROM または DVD のマウント

Oracle CD-ROM は、Rockridge Extensions 仕様の ISO 9660 フォーマットです。DVD は、DVD-ROM フォーマットです。

UNIX システム上で、ディスクを手動でマウントまたはアンマウントするには、`root` 権限が必要です。ディスクをドライブから取り出す前に、`umount` コマンドを使用してアンマウントします。

Red Hat システムにディスクが自動的にマウントされているかどうかを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# ls /mnt/cdrom
```

UnitedLinux システムにディスクが自動的にマウントされているかどうかを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
# ls /media/cdrom
```

ディスクがマウントされていない場合は、手動でマウントする必要があります。

次の説明では、ディスクのマウント・ポイントは `/cdrom` としています。使用しているマウント・ポイントと異なる場合は、すべての `cdrom` を正しいマウント・ポイント名に置き換えてください。

ディスクを手動でマウントするには、次の手順を実行します。

1. ディスクをディスク・ドライブに挿入します。
2. `root` ユーザーとしてログインし、すべてのユーザーがアクセスできるディスクのマウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
% su
Password:
# mkdir /cdrom
# chmod 777 /cdrom
```

3. ディスク・ドライブをディスクのマウント・ポイント・ディレクトリにマウントします。

Red Hat システムの場合は、次のように入力します。

```
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /mnt/cdrom
```

UnitedLinux システムの場合は、次のように入力します。

```
# mount -t iso9660 /dev/cdrom /media/cdrom
```

4. `root` アカウントを終了します。

```
# exit
```

## 2.10 インストーラの起動

1. oracle ユーザーとしてログインします。"su -oracle" マンドを使用して oracle ユーザーに切り替えた場合は、環境変数が oracle ユーザーに渡されないの、環境変数の値を再度確認します。
2. Disk 1 をディスク・ドライブに挿入します。
3. 「注意」の次に示すコマンドを実行して、ディスクから Oracle Universal Installer を起動します。

---

---

### 注意:

- Oracle Universal Installer の起動時は、root ユーザーとしてログインしないでください。root ユーザーとしてログインすると、Oracle Application Server の管理権限が root ユーザーに限られてしまいます。
  - mount\_point ディレクトリ内でインストールを開始しないでください。このディレクトリ内でインストールを開始すると、インストール・ディスクを取り出せない場合があります。次に示す cd コマンドにより、現在のディレクトリがホーム・ディレクトリに変更されます。
  - JDK 1.4.2\_02 で、ハンゲルや中国語のフォントがサポートされていないため、Oracle Universal Installer では、Linux 上でこれらのフォントを表示できません。
- 
- 

Red Hat システムの CD-ROM ユーザーの場合は、次のように入力します。

```
prompt> cd  
prompt> /mnt/cdrom/runInstaller
```

UnitedLinux システムの CD-ROM ユーザーの場合は、次のように入力します。

```
prompt> cd  
prompt> /media/cdrom/runInstaller
```

Red Hat システムの DVD ユーザーの場合は、次のように入力します。

```
prompt> cd  
prompt> /mnt/cdrom/application_server/runInstaller
```

UnitedLinux システムの DVD ユーザーの場合は、次のように入力します。

```
prompt> cd  
prompt> /media/cdrom/application_server/runInstaller
```



---

## インストール

この章では、次の2つの Oracle Application Server のトポロジをインストールする方法を説明します。

- **Java 開発者トポロジ**: J2EE アプリケーションのデプロイとテストのための単純コンテナが必要な場合は、このトポロジをインストールします。詳細は、[3.1 項「Java 開発者トポロジのインストール」](#)を参照してください。
- **Portal and Wireless 開発者トポロジ**: OracleAS Portal、Oracle Application Server Wireless または Oracle Internet Directory や OracleAS Single Sign-On のような Identity Management サービスを使用するアプリケーションを開発する場合は、このトポロジをインストールします。このトポロジをインストールするには、OracleAS Infrastructure 10g をインストールする必要があります。詳細は、[3.2 項「Portal and Wireless 開発者トポロジのインストール」](#)を参照してください。

これらのトポロジは、開発環境のためのものです。配置トポロジを含めた他のトポロジについては、Oracle Application Server のインストール・ガイドを参照してください。配置トポロジのための Oracle Application Server コンポーネントの共存を確認するために、Oracle Application Server のインストール・ガイドを確認することをお勧めします。

## 3.1 Java 開発者トポロジのインストール

Java 開発者トポロジは J2EE and Web Cache インスタンスで構成され、ここで、J2EE アプリケーションをデプロイし、実行できます。

J2EE and Web Cache インスタンスをインストールするには、次の手順を実行します。

1. インストーラを起動します。詳細は、[2.10 項「インストーラの起動」](#)を参照してください。
2. 「ようこそ」画面: 「次へ」をクリックします。
3. これがこのコンピュータにインストールする最初の Oracle 製品である場合は、次の画面の要求に従ってイベント・ディレクトリを設定する必要があります。

a. 「インベントリ・ディレクトリの指定」画面

「インベントリ・ディレクトリのフルパスの入力」: インストーラでファイルを格納するディレクトリのフルパスを入力します。Oracle ホーム・ディレクトリとは異なるディレクトリを入力します。

例: /opt/oracle/oraInventory

「OK」をクリックします。

b. 「UNIX グループ名」画面

インベントリ・ディレクトリの書込み権限を持つオペレーティング・システム・グループの名前を入力します。

例: oinstall

「次へ」をクリックします。

- c. oraInstRoot.sh の実行: 別のシェルで root ユーザーとして oraInstRoot.sh スクリプトを実行します。このスクリプトは、oraInventory ディレクトリにあります。

「続行」をクリックします。

4. 「ファイルの場所の指定」画面:

「名前」: この Oracle ホームを識別する名前を入力します。

例: OH\_J2EE\_904

「パス」: インストール先のディレクトリへのフルパスを入力します。これは、Oracle ホーム・ディレクトリです。

例: /opt/oracle/OraJ2EE\_904

インストール先のディレクトリが存在しない場合は、Oracle Universal Installer により作成されます。

インストール先のディレクトリを事前に作成する場合は、oracle ユーザーとして作成します。root ユーザーとして作成しないでください。

「次へ」をクリックします。

5. 「ハードウェアのクラスタ・インストール・モードの指定」画面：この画面は、コンピュータがハードウェア・クラスタの一部である場合にのみ表示されます。このインスタンスは、クラスタのすべてのコンピュータに自動的にインストールされることはありません。

Oracle Application Server のクラスタ環境へのインストールの詳細は、Oracle Application Server のインストール・ガイドを参照してください。

インストールを続けるには、「単一ノード・インストール」を選択し、「次へ」をクリックします。

6. 「インストールする製品の選択」画面：「Oracle Application Server」を選択して、「次へ」をクリックします。
7. 「インストール・タイプの選択」画面：「J2EE and Web Cache」を選択して、「次へ」をクリックします。
8. 「中間層インストールの手順のプレビュー」画面：「次へ」をクリックします。
9. 「インストール前の要件の確認」画面：使用しているコンピュータがすべての要件を満たしていることを確認して、「次へ」をクリックします。
10. 「構成オプションの選択」画面：

この Oracle Application Server インスタンスでキャッシュ機能を使用する場合は、「OracleAS Web Cache」を選択します。

「Identity Management Access」を選択しないでください。

「OracleAS Database-Based Cluster」を選択しないでください。

「OracleAS File-Based Cluster」を選択しないでください。

「次へ」をクリックします。

11. 「OracleAS インスタンス名と ias\_admin パスワードの指定」画面：

「インスタンス名」：このインスタンスの名前を入力します。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。

例：J2EE\_904

「ias\_admin パスワード」および「パスワードの確認」：ias\_admin ユーザーのパスワードを入力して、確認します。これは、このインスタンスの管理ユーザーです。

パスワードは5文字以上で、そのうちの1文字は数字にする必要があります。

「次へ」をクリックします。

12. 「サマリー」画面

選択した内容を確認し、「インストール」をクリックします。

Oracle Universal Installer によってファイルがインストールされ、Oracle Application Server コンポーネントが構成されます。多少時間がかかることがあります。

13. root.sh の実行ダイアログ

---

---

**注意：** 要求されるまで `root.sh` を実行しないでください。Oracle Universal Installer から、`root.sh` の実行を要求する画面が表示されます。

---

---

別のウィンドウで `root` ユーザーとしてログインし、`root.sh` スクリプトを実行します。このスクリプトは、このインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリにあります。`root.sh` スクリプトが終了した後に、`root.sh` の実行ダイアログで「OK」をクリックします。

「Configuration Assistant」画面には、Configuration Assistant の進捗状況が表示されます。Configuration Assistant によって、Oracle Application Server コンポーネントが構成されます。

14. 「インストールの終了」画面

「終了」をクリックして、インストーラを終了します。

## 3.2 Portal and Wireless 開発者トポロジのインストール

このトポロジで、Portal and Wireless 中間層をインストールします。これにより、OracleAS Portal や OracleAS Wireless などのコンポーネントを使用するアプリケーションを配置できるようになります。Portal and Wireless 中間層には、OracleAS Infrastructure 10g が必要です。これは、Portal and Wireless 中間層をインストールする前にインストールしておきます。

### 3.2.1 OracleAS Infrastructure 10g のインストール

次の手順により、新規データベースと新規の Oracle Internet Directory を持つインフラストラクチャがインストールされます。

1. インストーラを起動します。詳細は、[2.10 項「インストーラの起動」](#)を参照してください。
2. 「ようこそ」画面: 「次へ」をクリックします。
3. これがこのコンピュータにインストールする最初の Oracle 製品である場合は、次の画面の要求に従ってインベント・ディレクトリを設定する必要があります。
  - a. 「インベントリ・ディレクトリの指定」画面  
「インベントリ・ディレクトリのフルパスの入力」: インストーラでファイルを格納するディレクトリのフルパスを入力します。Oracle ホーム・ディレクトリとは異なるディレクトリを入力します。  
例: /opt/oracle/oraInventory  
「OK」をクリックします。
  - b. 「UNIX グループ名」画面  
インベントリ・ディレクトリの書込み権限を持つオペレーティング・システム・グループの名前を入力します。  
例: oinstall  
「次へ」をクリックします。
  - c. oraInstRoot.sh の実行: 別のシェルで root ユーザーとして oraInstRoot.sh スクリプトを実行します。このスクリプトは、oraInventory ディレクトリにあります。  
「続行」をクリックします。
4. 「ファイルの場所の指定」画面:  
「名前」: この Oracle ホームを識別する名前を入力します。  
例: OH\_INFRA\_904

「パス」: Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを入力します。

例: /opt/oracle/OraInfra\_904

インストール先のディレクトリが存在しない場合は、Oracle Universal Installer により作成されます。

インストール先のディレクトリを事前に作成する場合は、oracle ユーザーとして作成します。root ユーザーとして作成しないでください。

「次へ」をクリックします。

5. 「ハードウェアのクラスタ・インストール・モードの指定」画面: この画面は、コンピュータがハードウェア・クラスタの一部である場合にのみ表示されます。

Oracle Application Server のクラスタ環境へのインストールの詳細は、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドを参照してください。

インストールを続けるには、「単一ノード・インストール」を選択し、「次へ」をクリックします。

6. 「インストールする製品の選択」画面: 「OracleAS Infrastructure 10g」を選択して、「次へ」をクリックします。
7. 「インストール・タイプの選択」画面: 「Identity Management」および「OracleAS Metadata Repository」を選択して、「次へ」をクリックします。
8. 「Infrastructure のインストール手順のプレビュー」画面: 「次へ」をクリックします。
9. 「インストール前の要件の確認」画面: 使用しているコンピュータがすべての要件を満たしていることを確認して、「次へ」をクリックします。

2.8 項「ポート使用状況のチェック」を参照して、ポート 1521 が使用可能かどうかを確認します。

10. 「構成オプションの選択」画面:

「Oracle Internet Directory」を選択します。

「OracleAS Single Sign-On」を選択します。

「Oracle Delegated Administration Services」を選択します。

「Oracle Directory Integration and Provisioning」を選択します。

「OracleAS Certificate Authority」を選択しないでください。

「High Availability Addressing」を選択しないでください。

「次へ」をクリックします。

11. 「Internet Directory のネームスペースの指定」画面: 「推奨されるネームスペース:」を選択して、「次へ」をクリックします。

12. OracleAS Metadata Repository データベースを作成するための情報を入力します。

**a. 権限付きオペレーティング・システム・グループの指定画面**

この画面は、dba オペレーティング・システム・グループに属さないユーザーとしてインストーラを実行する場合に表示されます。

データベース管理者 (OSDBA) グループ: 属しているオペレーティング・システム・グループの名前を入力します。

例: dbadmin

データベース・オペレータ (OSOPER)・グループ: 属しているオペレーティング・システム・グループの名前を入力します。

例: dbadmin

「次へ」をクリックします。

**b. データベースの識別の指定画面**

「グローバル・データベース名」: OracleAS Metadata Repository データベースの名前を入力し、コンピュータのドメイン名をデータベース名に追加します。

例: asdb.acme.com

「SID」: OracleAS Metadata Repository データベースのシステム識別子を入力します。通常、これは一意のグローバル・データベース名ですが、ドメイン名は含めません。SID は、すべてのデータベースで一意である必要があります。

例: asdb

「次へ」をクリックします。

**c. SYS および SYSTEM ユーザーのパスワードの指定と確認画面: これらのデータベース・ユーザーのパスワードを設定します。これは、データベース管理に使用される権限付きアカウントです。**

「次へ」をクリックします。

**d. データベース・ファイルの場所の指定画面:**

データベース・ファイルのディレクトリの入力または選択: インストーラで OracleAS Metadata Repository データベース用のデータ・ファイルを作成するディレクトリを入力します。

例: /data\_partition/ias\_dbfiles/

「次へ」をクリックします。

**e. データベース・キャラクタ・セットの指定画面: 「デフォルト・キャラクタ・セットを使用」を選択します。**

「次へ」をクリックします。

13. 「OracleAS インスタンス名と ias\_admin パスワードの指定」画面：

「インスタンス名」： このインスタンスの名前を入力します。1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。

例：INFRA\_904

「ias\_admin パスワード」および「パスワードの確認」： ias\_admin ユーザーのパスワードを入力して、確認します。これは、このインスタンスの管理ユーザーです。

パスワードは5文字以上で、そのうちの1文字は数字にする必要があります。

「次へ」をクリックします。

14. 「サマリー」画面

選択した内容を確認し、「インストール」をクリックします。

Oracle Universal Installer によってファイルがインストールされ、Oracle Application Server コンポーネントが構成されます。多少時間がかかることがあります。

---

---

**注意：** UnitedLinux 1.0 上でのインストール中に再リンク段階でエラーが表示された場合、このエラーの解決方法については、3-12 ページの「[UnitedLinux の追加のインストール手順](#)」を参照してください。

---

---

15. root.sh の実行画面

---

---

**注意：** 要求されるまで root.sh を実行しないでください。Oracle Universal Installer から、root.sh の実行を要求する画面が表示されません。

---

---

別のウィンドウで root ユーザーとしてログインし、root.sh スクリプトを実行します。このスクリプトは、このインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリにあります。root.sh スクリプトが終了した後に、root.sh の実行ダイアログで「OK」をクリックします。

16. 「インストールの終了」画面

「終了」をクリックして、インストーラを終了します。

## 3.2.2 Portal and Wireless インスタンスのインストール

この手順により、Portal and Wireless インスタンスがインストールされ、3.2.1 項「OracleAS Infrastructure 10g のインストール」でインストールしたインフラストラクチャを使用するように構成されます。

1. インストーラを起動します。詳細は、2.10 項「インストーラの起動」を参照してください。
2. 「ようこそ」画面: 「次へ」をクリックします。
3. 「ファイルの場所の指定」画面:

「名前」: 新しい Oracle ホームを識別する名前を入力します。

例: OH\_PORTAL\_904

「パス」: Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを入力します。

例: /opt/oracle/OraPortal\_904

インストール先のディレクトリが存在しない場合は、Oracle Universal Installer により作成されます。

インストール先のディレクトリを事前に作成する場合は、oracle ユーザーとして作成します。root ユーザーとして作成しないでください。

「次へ」をクリックします。

4. 「ハードウェアのクラスタ・インストール・モードの指定」画面: この画面は、ハードウェア・クラスタの一部であるコンピュータにインストールする場合にのみ表示されません。

Oracle Application Server のクラスタ環境へのインストールの詳細は、Oracle Application Server のインストール・ガイドを参照してください。

インストールを続けるには、「単一ノード・インストール」を選択し、「次へ」をクリックします。

5. 「インストールする製品の選択」画面: 「Oracle Application Server」を選択して、「次へ」をクリックします。
6. 「インストール・タイプの選択」画面: 「Portal and Wireless」を選択して、「次へ」をクリックします。
7. 「中間層インストールの手順のプレビュー」画面: 「次へ」をクリックします。
8. 「インストール前の要件の確認」画面: 使用しているコンピュータがすべての要件を満たしていることを確認して、「次へ」をクリックします。
9. 「構成オプションの選択」画面:  
「OracleAS Portal」を選択します。

「OracleAS Wireless」を選択します。

「次へ」をクリックします。

**10. Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。**

**a. 「Oracle Internet Directory への登録」画面**

「ホスト名」: Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。

「ポート」: Oracle Internet Directory がリスニングしているポートのポート番号を入力します。Oracle Internet Directory のポート番号を特定するには、インフラストラクチャの `ORACLE_HOME/install` ディレクトリ内にある `portlist.ini` ファイルを確認してください。

「この Oracle Internet Directory には SSL 接続のみ使用」を選択した場合は、`portlist.ini` ファイル内の Oracle Internet Directory (SSL) パラメータからポート番号を入手する必要があります。

「次へ」をクリックします。

**b. 「Oracle Internet Directory に対するログインの指定」画面**

「ユーザー名」: 「orcladmin」と入力します。これは、Oracle Internet Directory 管理者の名前です。

「パスワード」: orcladmin のパスワードは、インフラストラクチャの `ias_admin` ユーザーのパスワードと同じです。このパスワードは、インフラストラクチャをインストールしたときに入力したものです (3.2.1 項「OracleAS Infrastructure 10g のインストール」の手順 13 を参照)。

「次へ」をクリックします。

**11. Metadata Repository の選択画面**

「リポジトリ」: この中間層インスタンスで使用する OracleAS Metadata Repository を選択して、「次へ」をクリックします。

**12. 「OracleAS インスタンス名と ias\_admin パスワードの指定」画面:**

「インスタンス名」: このインスタンスの名前を入力します。1 つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがある場合は、インスタンス名は一意である必要があります。

例: PORTAL\_904

「ias\_admin パスワード」および「パスワードの確認」: `ias_admin` ユーザーのパスワードを入力して、確認します。これは、このインスタンスの管理ユーザーです。

パスワードは 5 文字以上で、そのうちの 1 文字は数字にする必要があります。

「次へ」をクリックします。

### 13. 「サマリー」画面

選択した内容を確認し、「インストール」をクリックします。

Oracle Universal Installer によってファイルがインストールされ、Oracle Application Server コンポーネントが構成されます。多少時間がかかることがあります。

---

---

**注意：** UnitedLinux 1.0 上でのインストール中に再リンク段階でエラーが表示された場合、このエラーの解決方法については、3-12 ページの「[UnitedLinux の追加のインストール手順](#)」を参照してください。

---

---

### 14. `root.sh` の実行ダイアログ

---

---

**注意：** 要求されるまで `root.sh` を実行しないでください。Oracle Universal Installer から、`root.sh` の実行を要求する画面が表示されます。

---

---

別のウィンドウで `root` ユーザーとしてログインし、`root.sh` スクリプトを実行します。このスクリプトは、このインスタンスの Oracle ホーム・ディレクトリにあります。`root.sh` スクリプトが終了した後に、`root.sh` の実行ダイアログで「OK」をクリックします。

「Configuration Assistant」画面には、Configuration Assistant の進捗状況が表示されません。Configuration Assistant によって、Oracle Application Server コンポーネントが構成されます。

### 15. 「インストールの終了」画面:

「終了」をクリックして、インストーラを終了します。

### 3.2.3 UnitedLinux の追加のインストール手順

UnitedLinux 上で再リンク段階中にエラーが表示された場合は、インストーラのウィンドウを閉じないでください。次の手順を完了して、エラーを解決します。

1. 新規のターミナル・ウィンドウを開きます。
2. `$ORACLE_HOME/lib/sysliblist` ファイルを編集して、次のエントリを行の末尾に追加します。

```
-lgcc -L/opt/gcc295/lib/gcc-lib/i486-suse-linux/2.95.3
```

UnitedLinux の配布版によっては、必要なパスに `suse` 以外の文字列が含まれている場合があります。

3. 環境変数 `ORACLE_HOME` が正しく設定されていることを確認します。
4. 環境変数 `LD_LIBRARY_PATH` に `$ORACLE_HOME/lib` ディレクトリが含まれていることを確認します。
5. 次のコマンドを実行します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/genclntsh
```

6. インストーラのウィンドウ内で「再試行」をクリックします。以後、エラーが表示されずにインストールが続行されます。

### 3.3 「ようこそ」ページへのアクセス

インストールの後に Oracle Application Server の「ようこそ」ページにアクセスして、インストールに成功したことを確認します。「ようこそ」ページの URL は、次のとおりです。

```
http://hostname:http_port
```

`ORACLE_HOME/install` ディレクトリにある `portlist.ini` ファイルを確認して、`http_port` を特定します。`http_port` は、"Oracle HTTP Server listen port" 行に表示されます。

---

---

**注意：** 1つのコンピュータに複数の Oracle Application Server インスタンスがインストールされている場合は、各インスタンスが独自のポート番号のセットを持っています。正しいポート番号を使用していることを確認するには、`portlist.ini` ファイルを確認してください。

---

---

「ようこそ」ページには、次のような役立つページへのリンクが含まれています。

- Oracle Application Server 10g (9.0.4) の新機能
- Oracle Enterprise Manager Application Server Control (Application Server Control)。これは、ブラウザベースの管理ツールです。
- リリース・ノート
- デモ



---

## OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのインストール

OracleAS Metadata Repository を既存の Oracle データベースにインストールする場合は、Oracle Application Server Repository Creation Assistant (OracleAS RepCA) と呼ばれるツールを実行します。このツールによって、OracleAS Metadata Repository のデータが既存のデータベースにロードされます。

『Oracle Application Server Repository Creation Assistant 既存のデータベースへの Oracle Application Server Metadata Repository のインストール』に、OracleAS RepCA および関連ドキュメントがあります。



---

## アップグレード

この章では、J2EE and Web Cache のインストール・タイプ、および Portal and Wireless インストール・タイプの OracleAS Portal コンポーネントを、リリース 2 (9.0.2) またはリリース 2 (9.0.3) から Oracle Application Server 10g (9.0.4) にアップグレードする方法を説明します。

この章では、インフラストラクチャ内で OracleAS Portal スキーマをアップグレードする方法については説明しません。

この章には、アップグレード・プロセスの多くを自動化する、Oracle Application Server Upgrade Assistant (OracleAS Upgrade Assistant) の使用手順も含まれています。

### 関連項目： Oracle Application Server のアップグレード

この章では、次の項目について説明します。

- [5.1 項「表記規則」](#)
- [5.2 項「アップグレード前のタスクの実行」](#)
- [5.3 項「J2EE and Web Cache のアップグレードの実行」](#)
- [5.4 項「Portal and Wireless のアップグレードの実行」](#)

## 5.1 表記規則

第 5 章では、Oracle ホームへの参照に次の表記規則を使用します。

- リリース 2 (9.0.2) またはリリース 2 (9.0.3) Oracle Application Server インスタンスは、パス名の中で `<source_MT_OH>` として指定されます。
- 10g (9.0.4) インスタンスは、パス名の中で `<desination_MT_OH>` として指定されま  
す。

## 5.2 アップグレード前のタスクの実行

アップグレード前に、次の項のタスクを実行します。

- [5.2.1 項「Oracle Application Server 10g \(9.0.4\) のインストール」](#)
- コンポーネント特有のアップグレード前のタスクについては、Oracle Application Server のアップグレードを参照してください。

### 5.2.1 Oracle Application Server 10g (9.0.4) のインストール

アップグレード前に、Oracle Application Server 10g (9.0.4) をインストールする必要があります。Oracle Application Server 10g (9.0.4) のインストール中に、J2EE and Web Cache または Portal and Wireless のインストール・タイプを選択します。Oracle Application Server の宛先インスタンスがない場合、アップグレードは行われません。(新しいインフラストラクチャをインストールしないでください。)

ソース・インスタンスのインストール・タイプは、宛先インスタンスのインストール・タイプと一致している必要があります。Oracle Application Server のソースおよび宛先インスタンスは、同じコンピュータ上に存在している必要があります。ソース・インスタンスでインフラストラクチャが使用されている場合は、宛先インスタンスでも、同じ Oracle Internet Directory とメタデータ・リポジトリが使用されています。(新しいインフラストラクチャをインストールしないでください。) 9.0.4 のインストールでは、ソースの 9.0.2 インストールと同じ oraInventory ディレクトリを使用する必要があります。

---

---

**注意：** インストール前のすべての要件が満たされ、関連するすべての手順が手動で実行されていることが重要です。そうでない場合、10g (9.0.4) のインストールはリリース 2 (9.0.2) のインフラストラクチャとともに機能しません。特に、OracleAS Single Sign-on の構成は失敗します。

---

---

---

---

**注意：** インストール中に、OracleAS Metadata Repository 内の OracleAS Wireless スキーマがアップグレードされます。

---

---

**関連項目：**

- 3.1 項「Java 開発者トポロジのインストール」
- 3.2 項「Portal and Wireless 開発者トポロジのインストール」

## 5.3 J2EE and Web Cache のアップグレードの実行

この手順により、J2EE and Web Cache インスタンスをアップグレードできます。

1. 次のコマンドを使用して、Application Server Control を停止します。

```
<source_MT_OH>/bin/emctl stop  
<destination_MT_OH>/bin/emctl stop iasconsole
```

2. J2EE and Web Cache インスタンス内で、次のコマンドで、Web Cache、OPMN およびそれによって管理される Oracle Application Server プロセスを停止します。

```
<source_MT_OH>/opmn/bin/opmnctl stopall  
<source_MT_OH>/webcache/bin/webcachel stop  
<destination_MT_OH>/opmn/bin/opmnctl stopall
```

3. 次のコマンドで、OracleAS Upgrade Assistant を起動します。

```
<destination_MT_OH>/upgrade/iasua.sh
```

4. 「ようこそ」画面：「次へ」をクリックします。

5. 「Oracle ホーム」画面：

ドロップダウン・リストからソースの J2EE and Web Cache の Oracle ホームを選択して、「次へ」をクリックします。

6. 「コンポーネントの調査」ダイアログ画面：

「OK」をクリックします。

7. 「要件」画面：

すべての要件が満たされていることを確認し、すべてのチェック・ボックスにチェックマークを付けて、「次へ」をクリックします。

8. 「サマリー」画面：

「完了」をクリックして、アップグレード処理を開始します。

9. 「アップグレードに成功しました」ダイアログ画面：

「OK」をクリックします。

**関連項目：** アップグレードした J2EE and Web Cache の構成が次のいずれかの状態にあるときは、Oracle Application Server のアップグレード・ガイドの実行する必要のあるアップグレードの手動タスクに関する項を参照してください。

- ファイルがデフォルト以外の場所にある
- 構成ファイルがカスタムのファイルおよびディレクトリを参照する
- 10g (9.0.4) 内で使用するデフォルトのドキュメント・ルート・ディレクトリ内に静的ドキュメントおよびディレクトリがある
- 最初のリスナーとして Web Cache 構成されている

## 5.4 Portal and Wireless のアップグレードの実行

次の手順に従って、Portal and Wireless 中間層をアップグレードします。

1. 次のコマンドを使用して、Application Server Control を停止します。

```
<source_MT_OH>/bin/emctl stop  
<destination_MT_OH>/bin/emctl stop iasconsole
```

2. J2EE and Web Cache インスタンス内で、次のコマンドで、Web Cache、OPMN およびそれによって管理される Oracle Application Server プロセスを停止します。

```
<source_MT_OH>/opmn/bin/opmnctl stopall  
<source_MT_OH>/webcache/bin/webcachectl stop  
<destination_MT_OH>/opmn/bin/opmnctl stopall
```

3. 次のコマンドで、OracleAS Upgrade Assistant を起動します。

```
<destination_MT_OH>/upgrade/iasua.sh
```

4. 「ようこそ」画面:

「次へ」をクリックします。

5. 「Oracle ホーム」画面:

ドロップダウン・リストから Portal and Wireless のソースの Oracle ホームを選択して、「次へ」をクリックします。

6. 「コンポーネントの調査」ダイアログ画面:

「OK」をクリックします。

7. 「要件」画面:

すべての要件が満たされていることを確認し、すべてのチェック・ボックスにチェックマークを付けます。「次へ」をクリックします。

8. 「サマリー」画面:  
「完了」をクリックして、アップグレード処理を開始します。
9. 「アップグレードに成功しました」ダイアログ画面:  
「OK」をクリックします。

**関連項目:** Parallel Page Engine または Portal Development Kit Services for Java がカスタマイズされていた場合は、Oracle Application Server のアップグレード・ガイドの OracleAS Portal のアップグレードの実行に関する項を参照してください。これらのカスタマイズは、<source\_MT\_OH>内のファイルから <destination\_MT\_OH>内の対応するファイルにコピーする必要があります。



# 6

---

---

## その他のリソース

## 6.1 クイック・リファレンス

表 6-1

リソース	連絡先 / Web サイト
開発者向けのテクニカル・リソースにアクセスできます。	<a href="http://otn.oracle.co.jp/">http://otn.oracle.co.jp/</a>
インストール・マニュアルにアクセスできます。	<a href="http://otn.oracle.co.jp/install/">http://otn.oracle.co.jp/install/</a>
サポート・サービスに関する情報にアクセスできます。	<a href="http://www.oracle.co.jp/support/">http://www.oracle.co.jp/support/</a>
日本オラクル技術営業の連絡先です。	0120-155-096 (受付時間等の詳細は後述)

## 6.2 オラクル製品のインストールに関する情報

オラクル製品のインストールに関する情報及びマニュアルを提供しております。

以下 URL をご参照ください。ただし、個々の環境に依存する問題、検証が必要となるようなケースはサポートサービス（有償）の締結が必要になりますのでご了承ください。

- ❑ OTN インストール・センター  
<http://otn.oracle.co.jp/>  
 (場所) [OTN] – [テクノロジーセンター] – [インストール]
- ❑ Oracle Technology Network・掲示板  
<http://otn.oracle.co.jp/>  
 (場所) [OTN] – [掲示板] – [ビギナー・初心者の部屋]
- ❑ インストレーション・ガイド・ダウンロード  
<http://otn.oracle.co.jp/>  
 (場所) [OTN] – [ドキュメント] – [製品名] – [OS]
- ❑ 製品 FAQ 検索  
<http://support.oracle.co.jp/>  
 (場所) [Oracle Ineternet Support Cneter] – [製品 FAQ 検索]  
 キーワード：インストール、install など

上記を参照しても解決されないインストール時の不明／問題点については支援サービスを提供しております。下記オラクル製品が対象になりますので下記 URL からご質問くださいますようお願いいたします。

- インストールサービスご利用方法  
[http://www.oracle.co.jp/install\\_service/](http://www.oracle.co.jp/install_service/)
  - 対象製品
    - Oracle Database Standard Edition
    - Oracle Database Personal Edition
  - 対象 OS
    - Linux Intel
    - Microsoft Windows

## 6.3 Oracle Technology Network Japan

OTN Japan は開発者に必要な技術リソースを提供する会員制、日本オラクル公式技術サイトです。OTN Japan にご登録（無償）いただくと、技術資料、オンライン・マニュアル、ソフトウェア・ダウンロード、サンプル・コード、掲示板、ポイントプログラム、オラクル関連書籍のディスカウント、OTN 有償プログラムなど様々なサービスを受けることができます。

- OTN Japan 登録方法  
<http://otn.oracle.co.jp/>  
上記 URL から「OTN の歩き方」をご覧ください。
- 技術資料  
<http://otn.oracle.co.jp/products/>  
オラクル製品の最新情報を提供します。目標とする技術資料をすばやく参照できるわかりやすいカテゴリーになっています。
- ソフトウェア・ダウンロード  
<http://otn.oracle.co.jp/software/>  
オラクル製品のトライアル版、早期アクセス版、ユーティリティ、ドライバなどを無償でダウンロードできます。最新バージョンをタイムリーに掲載していますので、OTN Japan で提供している技術資料、ドキュメントなどと併せて使用することにより、いち早く最新のオラクルテクノロジーを体験できます。
- ドキュメント  
<http://otn.oracle.co.jp/document/>  
オラクル製品のインストレーション・ガイド、リリース・ノートなどのドキュメント（マニュアル）を掲載しています。製品に同梱されているドキュメントから有償マニュアルに至るまで、最新のドキュメントをタイムリーに掲載しています。

□ サンプル・コード

[http://otn.oracle.co.jp/sample\\_code/](http://otn.oracle.co.jp/sample_code/)

開発者がちょっとしたところで苦勞するプログラムのサンプルを掲載しています。オラクル最新テクノロジーに準拠したサンプルプログラムの数々をお役立てください。

□ 掲示板

<http://otn.oracle.co.jp/forum/>

オラクル製品を用いて開発される皆さんのためのコミュニティです。Web によるディスカッション・フォーラム（掲示板）を通して、オラクル開発者間で情報交換ができます。それぞれの開発ノウハウを共有することで、より効率的な開発ができます。OTN 掲示板専用のビューア「OTN Viewer」もごございます。

□ ポイントプログラム

<http://otn.oracle.co.jp/point/>

OTN Japan 活性化に貢献された会員にポイント進呈する OTN ポイントプログラムを設けています。獲得ポイントは OTN グッズと交換したり、掲示板投稿時の懸賞ポイントとして使用できます。

□ OTN 有償プログラム

<http://otn.oracle.co.jp/upgrade/>

OTN 有償プログラムは、OTN 会員様向けの有償アップグレードサービスです。OTN Japan サイトでご提供している無償サービスに加え、最新のオラクル製品を開発ライセンスでご使用いただける OTN Software Kit（日本語版 CD-ROM）の送付やオラクル技術書籍ご購入時のディスカウントなど、有償ならではの様々なサービスをご提供いたします。

□ お薦めサービス「SQL 構文検索サービス」

<http://otn.oracle.co.jp/document/sqlconst/>

SQL 文や SQL 関数をオンラインで参照できる SQL 構文検索サービスです。

□ お薦めサービス「エラー・メッセージ検索 (Oracle9i)」

<http://otn.oracle.co.jp/document/msg/>

オラクル製品の使用中に表示されるエラー・メッセージについて検索します。

□ お薦めサービス「TechBlast メールサービス」

<http://otn.oracle.co.jp/techblast/>

OTN Japan では配信を希望された会員の皆様へほぼ月に 1～2 回メールをお送りしています。新着情報のほか、会員の皆様には是非ともお知らせしたいセミナーやイベント情報、読み物として製品や最新技術に関する連載を掲載しています。

## 6.4 OracleDirect

OracleDirect では、電話とインターネットを通じて、製品ご購入前のオラクル製品に関連するお問い合わせをはじめとする、お客様からの様々なお問合せに対応いたします。

OracleDirect に関する詳細は、下記の Web サイトをご覧ください。

<http://www.oracle.co.jp/contact/>

□ お問い合わせ先

TEL : 0120-155-096

FAX : 03-3511-5339

Web 問合せ : <http://www.oracle.co.jp/contact/>

※電話受付時間 : 9:00 ~ 12:00、13:00 ~ 18:00 (土、日、祝祭日、年末年始を除く)

また、OracleDirect にてお受けできるご質問内容は以下の通りとなりますので、ご連絡の前にご確認ください。

ご質問にお答えできる内容 (概要)

- 製品に関して日本国内で公表されている一般的な内容
    - 出荷日、出荷予定日
    - 価格およびライセンス
    - システム要件
    - ハードウェア (メモリ容量、ディスク容量)
    - ソフトウェア (対応 OS、対応コンパイラなど)
    - 製品の基本機能 (カタログに記載されているレベルまで)
    - 製品バージョン (RDBMS、Net 等の接続対応バージョンの案内)
    - メンテナンス・サポート契約の概要
      - ※メンテナンス・サポート契約の照会・確認・お見積りはディストリビューションセンターまで。
  - カatalog、資料請求、セミナー内容に関するお問合せ
  - お客様の個別環境への提案
  - 製品概要の説明や応用例、システム構成について営業担当者への直接相談
- 以下のお問合せにはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。
- マニュアルに関すること (オンラインマニュアルも含む)
  - 国内未発表の内容 (日本オラクルが正式に公表した内容以外のもの)

- 他社から販売されているオラクル関連製品に関するお問合せ
- 技術的な内容（テクニカルサポートレベル）

## 6.5 サポートサービス

オラクルではお客様のシステムの健康状態を維持するために、**Oracle Support Services** をご用意しています。オラクル製品の専門技術者が、様々な形でお客様の問題解決のお手伝いをいたします。

- 障害回避策提示
- 修正プログラムの提供
- インターネット・サポート
- 技術情報の提供 など

**Oracle Support Services** でメンテナンス・サポートをご契約のお客様は、以下の技術サポートを受けられます。サポートサービスには電話やインターネットによる技術サポートの他、インターネット上での各種技術情報へのアクセス、ご契約済み製品のバージョンアップ用メディアの提供、**Oracle Support Letter**（毎月）の提供などが含まれます。

### □ 技術サポート

ご契約のお客様は、インターネットおよび電話による技術サポートを受けられます。お問合せは、毎日 24 時間受付けております。お問合せの方法についての詳細は、ご契約されたお客様にお送りする「**Oracle Support User's Guide**」をご覧ください。

インターネットでは、次の Web サイトで **Oracle Support Services** について紹介しています。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

### □ OiSC（Oracle internet Support Center）

サポート・センターでは、24 時間ご利用いただけるポータル Web サイトとして OiSC をご用意し、お客様に役立つサポートサービス関連情報を提供しています。

- サポート関連の新着情報
- インターネット上での **Oracle Support Letter** の参照
- パッチのダウンロード
- お問合せの受付、更新、状況確認
- 下記 **MetaLink** へのリンク
- サービス内容のご紹介

□ KROWN

ディレクトリ・サービスやキーワード検索サービスを備えた、25,000 タイトル以上からなる技術情報です。前記 OiSC からご利用ください。

MetaLink : Oracle Support Services をご契約のお客様は、Web によるサポートサービスである MetaLink を 24 時間ご利用いただけます。MetaLink は、全世界から集められた英語での技術情報が収録されている知識ベースです。インターネット上でご覧いただけます。

□ Oracle Support Letter

毎月更新されるサポート技術情報や、新しいバージョンの製品情報などを CD-ROM でお届けします。Oracle Support Letter には以下の情報が掲載されています。

- 毎月の新着情報
- 技術情報 (Q&A、Oracle User バックナンバーなど)
- お客様へのご案内
- その他 (製品のバージョンアップ情報、サポートサービス関連の各種注文書など)
- Oracle Support Letter は OiSC でもご覧いただけます。

□ お問い合わせ先

日本オラクル ディストリビューションセンター

TEL : 0570-093812

※受付時間 : 9:00 ~ 12:00、13:00 ~ 17:00 (土、日、祝祭日、年末年始を除く)

ディストリビューションセンターでは、Oracle Support Services のメンテナンス・サポート契約について、以下のような情報をご案内いたします。

- 新規メンテナンス・サポート契約に関するご相談
- メンテナンス・サポート契約に基づくサービス内容のご紹介
- メンテナンス・サポート契約書の記入方法
- メンテナンス・サポート料金について

または、次の Web サイトにアクセスしてください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

## 6.6 研修サービス

日本オラクルの研修サービスに関する詳しいお問合せは下記までお願いいたします。研修サービスに関する詳細は、下記 Web サイトでもご紹介しています。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

□ お問合せ先

日本オラクル株式会社エデュケーションサービス本部 研修コールセンター

TEL : 03-5766-4411

FAX : 03-5766-4400

※電話受付時間 : 9:00 ~ 12:00、13:00 ~ 17:00 (土、日、祝祭日、年末年始を除く)